

卑小に考える人びとは、巨大国家と、個人の集まりの小さな集団が「取引」して「共闘」するなどということがあったと信じていることができない。だからそれをねじ曲げて歴史記述するのである。

ベ平連は、アメリカ海軍調査部(NIS)と共和党右派のストロム・サーモンド上院議員が言うような、また産経新聞が言うような、共産主義者の団体でもソ連の手先でもなかった。それはアメリカ議会公聴会に提出されたアメリカに戻った脱走兵の供述書(アメリカ側文書)が描いているように、ベトナム戦争に反対する市民の集まりであり、KGB秘密報告書(ソ連側文書)が書いているようにソ連(KGB)と対等に向かい合う小集団であった。つまりアメリカとソ連の情報機関の文書のいずれもが、ベ平連は党派からも国家からも独立した市民の運動であると記述しているのである。

ソ連(KGB)との「共闘」はベ平連の側からすれば、その運動原理、つまり思想信条・イデオロギ―がことなり、ことなつた組織原理をもつていても、ある一点で合意をしたなら、その合意にもとずいて合意が保たれる限りは共同行動をする、というものであった。もともと後年になって吉川勇一さんは小熊英二さんのインタビューに答えて、「脱走兵を助けてくれるなら、悪魔の手だつて借りたいと言う気分でしたからね」と言っている(注12)。「悪魔」というメタファーを使っているぐらいだから、KGBと共同活動をするには、相当な覚悟があつたのである。

前述のKGBのベ平連に関する秘密報告書以外に、私はもうひとつベ平連に関するKGB秘密報告書をアメリカ議会KGBファイルの中に見つけたが、それによればソ連(KGB)は、ほとんど何もし

ないで得たこのチャンスを、反ベトナム戦争のプロバガンダ(政治的宣伝)に使おうとしていた。別に驚くにあたいたくないが(注13)。しかし吉川報告にあるように、ソ連(KGB)はこのことに特別熱心であったわけではなく、ペ平連(ジャテック)とソ連(KGB)の秘密共同行動は一年とちよつとで、ソ連側イニシアチブでなくなり、ペ平連(ジャテック)は脱走兵をヨーロッパに送る手立てをうしなつた。その後は、ペ平連(ジャテック)はソ連とはまったく関係なく、自らの方法で脱走兵をヨーロッパに送る手立てを作つたのである。このことに關しては前述の「となりて脱走兵がいた時代」、また「私たち、脱走アメリカ兵を越境させた……」などにその一部が描かれている(注14)。またこのあと、軍を離れた脱走兵を助ける運動は、隊内にとどまる米軍兵士たちの反戦運動を助ける運動に方針を変えていった。

それでは産経新聞などが報道したレフチェンコ証言の場合はどうか？

スタニスラフ・レフチェンコは一九七五年(昭和五十年)にソ連の「新時代」紙の特派員として日本にやってきた。しかし実際は、KGBの情報将校であつて特派員は隠れ蓑であつた。そして一九七九年(昭和五十四年)にアメリカに亡命、一九八二年(昭和五十七年)にアメリカ議会の非公開公聴会でKGBの日本でのスパイ活動について証言している。この記事録は議会図書館にファイルされて、それを讀んで毎日新聞(後に産経新聞)の古森義久記者が日本に報道した。

証言の内容は、一九七五年から一九七九年までの日本でのソ連のKGB情報将校としての活動、な

らびにそれ以前にモスクワのKGBオフィスで日本に関する情報を読んだり聞いたことを元にしてゐる。この証言とその後の彼の発言はセンサーショナルにあつかわれ、日本は外国情報機関の「スパイ天国」であり、KGBはエージェントを使いソ連に利する情報、日本を害する情報を簡単に手に入れている。あるいはニセ情報を使いソ連に利する工作をしている、というようなことがその後に興味本位で、また警告を含んで多く書かれるようになった。名前をあげられたエージェントは、国会議員から、ジャーナリスト、公務員、運動関係まできわめてひろい範囲におよんでいる。

レフチェンコはベ平連(ジャテック)に関しては、内部の幹部をエージェントとして取り込み、それを通してソ連に利する運動をさせたとし、アメリカの反戦脱走兵運動ならびに米軍内の兵士による反戦運動は、すべてソ連KGBがベ平連(ジャテック)を通して行つたと言つてゐる^{注15}。

この場合レフチェンコの言うエージェントとは、彼の定義によれば、その役割(ソ連に情報を提供するということ)を自覚しているのか、まったく知らないで利用されているのかは関係ない。対価としてお金を貰つてゐるのかいないのか、ソ連のイデオロギーに賛同しているのかどうかということも関係ない。その人間が、ソ連に利する情報を持っていてそれを提供してくれるかどうかという一点に、その人間の意図するところとは関係なくKGBから見て機能として「エージェント」(情報を提供する人間、ソ連に利する工作をする人間)かどうかということにかかつてゐる。

このレフチェンコ事件では、スパイという言葉がメディアでは盛んに使われたが、レフチェンコは

情報将校でスパイではない。エージェント（スパイ）から情報を受け取る役割で、彼は自分の活動はスパイ小説みたいではないと言っているが、あるときは情報の受け渡しの一例を、まるでスパイ小説もどきだった、とも言っている。ということは彼もまた自分の活動を、人びとのスパイ小説・スパイ映画への興味を利用して説明していて、彼の証言は自分自身をスパイ小説・スパイ映画のスパイとは違うと言いながら、虚構のスパイに擬している。彼が数年日本にいた間、五人のエージェントと仕事をしていたと言うが、彼の証言は人に聞いたこと、記録と報告書から得た情報（と彼は言う）、憶測などを含み、数十人のエージェントについて語っている。だからそれは情報将校レフチェンコのやったことではなくて、情報将校レフチェンコが語った「スパイ物語」である。その二つのこと、「やったこと」と「語った物語」の違いは大きい。

レフチェンコは、ベ平連の中にKGBエージェントを作った、エージェントを送り込んだ、と自分がしたように言ったり、書いたりしている。しかしレフチェンコがKGB情報将校として東京に来たのは一九七四年（昭和四十九年）末、活動は一九七五年（昭和五十年）からで、すでにその時点でベ平連は解散しているから、これらのことはすべて伝聞による。

レフチェンコの言うベ平連内「エージェント」は、ベ平連事務局長の吉川勇一さんのことだろう。吉川勇一さんはベ平連（ジャテック）を代表してソ連大使館に行つて、反戦脱走兵の国外脱出に関する情報を交換して交渉をしているし、KGB資料によれば吉川さんは、ジャテックへ二十万円のカンパ

(運動活動費への寄付)をしてほしいとも言ったと書かれているから、情報交換とお金のことがあるの
で、これはソ連(KGB)の定義する「エージェント」ということになる。相手が独立した運動であり
ソ連のための運動ではなくてベトナム反戦運動であったとしても、ソ連を利する情報、日本・アメリ
カを害する情報を提供する人間、ソ連に利してアメリカ・日本に害をなす行動をする人間はすべてエ
ージェントと定義されるのだから。

レフチェンコは、ベ平連内エージェントを使って脱走兵運動を組織した。と言ったり書いたりして
いて一九六七年(昭和四十二年)秋にベ平連に来た「イントレピッドの四人」のケースも、ソ連がベ平
連内エージェントを使い最初から関わっている、と言っている。しかし吉川勇一さんがイントレピッ
ドの四人の国外脱出、ヨーロッパ行きのためにソ連客船バイカル号を使う折衝にソ連大使館に出かけ
るのは、ベ平連がすでにイントレピッドの四人を匿っているときで、ソ連は吉川さんがソ連大使館に
出かけて行った前のことはいっさい知らない。だからソ連(KGB)がイントレピッドの四人に関して、
最初から、つまり米兵に脱走を呼びかけることから関与していた、というようなことはありえない。
あるいはまたその後ソ連経由でスウェーデンにわたった反戦脱走兵のケースも、ベ平連内エー
ジェントを通して、脱走兵に働きかけそれを匿うことすべてにソ連(KGB)が関与した、ソ連KGBが
行ったと言うが、現場にいた人間としてそんなことはありえない。

第一、すでに引用したKGBからソ連中央へあてた秘密文書の中で、イントレピッドの四人はベ平
連のやったことであって、いまベ平連はそれ以外の何人もの脱走兵を匿っていて、それをソ連経由で

ヨーロッパに送りたいという申し出があるが、これはベ平連のやることであり、ベ平連が自分たちで船を組織してソ連領内につれてくる限りにおいては反戦脱走兵をスウェーデンに送ることを引き受ける、と書いている。レフチェンコが全部私たち(KGB)がやったと言うが、しかしその時代に書かれたKGBからソ連党中央への秘密文書では、それと反対のことが書かれているのである。前に書いたが、この秘密文書はソ連崩壊でアメリカに流れたもので、書かれた当時にそれが公になるとは思ってもみなかっただろう。それは情報操作として書かれたものではない。レフチェンコの自分を売り込む言葉と、この秘密文書の言葉のどちらが歴史的に正しいかはあきらかなことである。

実際あのととき反戦脱走兵を助ける非公然の運動をしていた若い活動家たちのほとんどは、私を含めてソ連に幻想を持たずに共産主義者などでなかったのに、レフチェンコによってソ連のエージェントである、と言われることになった。こうやってベ平連ジャテックⅡソ連KGBエージェントという図式ができあがったが、それはレフチェンコとそれを報道した古森記者によって作られたものである。

もうひとつレフチェンコはベ平連(ジャテック)の助けでソ連にわたり、モスクワでアメリカ大使館に駆け込んだ脱走兵コーツについて、自分がコーツの担当でモスクワでいっしょにいたのだが、コーツはホテルのバーでアメリカ大使館で働いている女性に出会って、モスクワのアメリカ大使館の場所を知った。そして自分の目を盗んでアメリカ大使館に駆け込んでしまった、と書いている。

しかしレフチェンコは同じ文章で、こういう活動の場合は少しのミスをしなくてもすぐに仕事をおろさ